

島田正治

再びグアナファートへ出かけた。ことしになって四度目である。前回前々回と描いてきたこの街のパノラマ風景がなにか物足りない、気に入らない。それで再度の挑戦となった。ピピラの丘からの下方の眺めがテーマとなる。うまいぐあいにこの丘の展望台から一段下ったところに一か所、芝生の空地があってここが描くに絶好の場所となった。これはまさに天下一、青天井のアトリエである。

ここでやおら腰を下して持ってきた手さげ袋から道具をひろげる。ビニールの敷物、硯、筆、紙、墨、水など。そして座ぶとんがわりの尻あて、これは長時間腰を下して描いていると、尾骨が痛くなるのを防ぐ。長年のあいだにあれこれ工夫してきたのである。

墨をすりながら、あたりを見回しても、人に気づかれていないようで安心した。いつもだと、たいいてい道具をひろげようとしただけで、物見高いメキシコ人にとり囲まれてしまう。あまり好むところではない。見られるのは緊張もするし、集中力に欠けてくる。

\*-----\*

さて、墨は十分に濃くする。墨をすりながら下方を眺めてきょうはどこから描こうかとあれこれ考える。墨を濃くするのは、今は雨期で、自然そのものが湿っぽい、その影響をうけて紙も湿気を帯びる。濃くすったつもりの墨がさて画仙紙に描いてみると淡くなる。それはそれで、またちがった味わいのある絵となるが、わたしの好みからいうと、やはり墨で描くメキシコは、きっぱりとした濃墨の、乾いた墨画にしたい。産経抄の元筆者だった石井英夫さんが書いて下さったように、淡い水墨画から水を弾き出した、そんな絵を描きたいと念じるのである。

言うは易く、行うは難しだが、すでに五十年余、ずっとやめないできょうまで来られたのは、まことにうれしくありがたい。ひとり道、ひとり描くがモットーで今も変りはない。師匠もなし、弟子もなし、これを貫く。先生はただ自然のみ。

\*-----\*

グアナファートでは折りから毎年十月に開かれる「セルバンティノ国際芸術祭」が会期中で、国内はもちろんのこと海外から訪れる人たちも多く見られ、特に世界遺産に登録され紹介されてからは格別人がふえたように思う。さまざまなイベントが企画興行されていたが、中でも日本から来た舞踊の「山海塾」は目を見はった。公演はグアナファートの公会堂、できてからまだ何年も経っていない新築同然のモダンな建物で街から少し離れて丘の中腹にあった。二千人は収容できる。三日間共、ほぼ満員になるほどの盛況ぶりだった。

舞台はまっ黒、そこには白い蓮の葉が二百本ほど、出演者は七名、みな頭を剃り上から下まで真っ白音楽は琴、太鼓、笛など、主に東洋的な楽器である。無言劇パントマイム。あとピアノ、バイオリンも加わった。

始ってから、この異様ともいえる雰囲気にもメキシコ人は固唾をのんだ。静まりかえって、咳ひとつない。踊ったりはねたりする。どちらかという西洋的な踊りとはその逆でびっくりしたらしい。一時間四十分の休みなし、終わったときは、総員が立ち上がって「ブラボー」「ブラボー」の連呼。何度も何度もカーテンコールがあった。今や演劇の世界も東洋も西洋も一つになりつつある。（つづく）

ご意見・ご感想はアルテ・シマダまでお送りください。